

書
西
山
公
第
一

御徳編卷之十
西山公第一

明治十九年
八月
點
查
章

和泉文化会館
33.7.30 和
36266

A260
7
1A-17

沙母付吾馬物藤原重則女也
宮永天戌辰六月十日庚子常別
城下三木仁善之次家少く
威多々走と猛々たる
沙世いと高く沙顔おも長小
兩方小角のみ目角のみ

なりし大神乃目のより細きくは沙見元多成
沙見今よりと尋常の目より大なる御眼
沙見程程なるともと程如陰集ともなくは
若き沙見世より元男の聞えたる沙見後
西に御隠指ぬらるる沙見頻毎沙見又これ
沙見發發をとりゆく沙見因す又沙見も
此能く御目と御眼とをくはると沙見之故沙
目の玉眩きすは沙見入まればるゆゑと
るゆゑ又沙見の故御劍とく聲とす御陰はよ

くは沙見今より此程とくは沙見元より又沙
見今よりとくは沙見指動きとくは沙見を
うちがまはれ沙見入まればるゆゑと御陰はよ
少御刺刺をりともは沙見入まれば沙見今より
さう成すも元ち之ゆゑ又沙見も常通沙見とく
ともは沙見隠しは御沙見進居すとくは沙見を
又沙見如沙の沙見御相より子とくは御の上式を
上の人為の外成やけ顔を押しとくは御老を
沙見年の時と御大城の御を飛越とくは御の又

少筆の内、あの事、せしむる事、是れ
地震、雷、火、水の、^新人、の、材、不、熟、精、中、事、少、も
遂、^下少、筆、^上少、筆、^色若、^て、^言少、筆、^又、^以、^今、^の
キ、^一、^句、^以、^上、^稿、^の、^如、^く、^精、^ま、^く、^志、^ん、^者、^多、^れ
少、筆、^之、^精、^ま、^も、^少、^將、^場、^又、^は、^少、^精、^れ、^少、^の、^材、^を
事、^少、^す、^り、^わ、^ら、^も、^う、^と、^み、^や、^り、^精、^の、^ま、^い、^り、^と、^梳
少、^く、^麻、^衣、^の、^ま、^と、^ま、^を、^と、^麻、^衣、^に、^け、^ら、^う、^る、^事、^は、^感、^の
少、^あ、^ら、^少、^違、^枝、^方、^及、^少、^家、^書、^の、^心、^を、^竹、^中、^為
事、^少、^ふ、^ら、^う、^と、^考、^へ、^ち、^ん、^又、^少、^思、^慮、^の、^深、^き、^ふ、^ら

中、^少、^及、^少、^在、^中、^下、^丈、^之、^の、^人、^少、^對、^一、^所、^空、^あ、^ら、^る
少、^精、^ま、^さ、^ま、^と、^是、^又、^南、^度、^の、^事、^少、^す、^と、^以、^て、^一、^働、^き、[、]
流、^り、^う、^し、^く、^お、^世、^歴、^少、^又、^和、^字、^漢、^字、^の、^句、^毎、^信、^信、^の
佛、^は、^神、^學、^醫、^書、^希、^故、^詩、^又、^瞬、^句、^詩、^餘、^和、^文、^類
武、^飛、^象、^何、^ふ、^ら、^ん、^世、^存、^在、^と、^是、^也、^又、^天、^文、^地、^理、
會、^款、^年、^未、^だ、^石、^名、^悉、^く、^少、^免、^之、^又、^上、^古、^の、^秘、^後、^友
是、^和、^の、^秘、^後、^と、^り、^の、^武、^或、^樂、^器、^及、^ひ、^賦、^友
益、^物、^道、^と、^後、^方、^池、^也、^存、^を、^考、^す、^れ、[、]、^又、^細、^書、^画
以、^科、^理、^と、^し、^て、^推、^{され}、^れ、^と、^考、^す、^方、^の、^事、^有、^ら

惣より思くし初名は長丸後千代松と改
 名し名を光玉晋書陸倕海聖
德貞光朝大主初の沙字は佳亮書
 經又觀之易の觀之
先の字かと中后王子就子亮字出晋
書謝靈運傳
 以改父又日新翁と号し又常山と号す或は
 率由中と号し又梅里と号し是を其の奉伯の墓記
の存あり其奉伯を以
善行と稱す於乎停之少叙し後世位なる智後之位
 右近衛隆中將と稱し威公の道玄沙家督にお
 侍りて参儀あり中將放の如し以後左の初
 隆中納言の位に遷るは隆中後とせん和達字
下向し

一 寛永八年辛未 西宮三木仁衛之次一小てこの
 子とてよふ侍交り侍給ひは所志山崎別
 社信守光院世伝信守呼と高橋
と云ふをよと云ふととヤ者世門首を
 再り考り 西山を見えり世見平生の人小遊に
 何とてと親の形よ侍給ひ也と立寄りて玉書を
 立りし沙母公 西宮浅沙信昭の首所とて水よ
 せし中植と頼房を仁衛文歸小佐也と云
 仁衛信光宅少盛沙信生也と云うはく院
 沙信育侍信光男一人女二人の侍守り附

なりし母也

一 因十年癸酉頼房内世継いごと定く下り不
大榎家卷上言おく中山備前守丹治信若忠
家産を頼房得水戸下りし子孫二方代撰言より
抄家存あり
あり、西公磨斗成は頼房を爺とし守り
はるしは極方の中少くは務を継ぎ頼房
守人方言上致し世継おし定くは因年
江入しはしり頼房は時し年六

一 因十年甲戌 西公大榎 家光之初は頼房

たしあしあしあしあし又留星の祠の像を造りて
はるしは成長し改しは又筆は掃き異世追を
知まらぬ世の人皆知まらぬ是を因年とて又留星
を造せしは自然の法奇遇とて人々中あり
後子武州小石川邸の園後樂園に小堂築建く件の
像を以て安置せし因年小石川は後園は例橋
の馬場と申すなり頼房公刺違者多御侍との
首を以て安置せしは頼房入て 西公の忠義
ありしは頼房は彼首を以て承せしは

らま右馬場とアは沙威形より此の方より
は宮に所てより女道細く水流ハ林之南にて
空も女童扱て仲しく難き可なりて沙亦不
相話の老女初女房建基怖敷事と思ひ 西宮
の田孫子いゝおんこ我擲り所ふ 西宮老
沙常きく沙座を思ふる時 杉房を思ふる
行ふとそ中経指我思預け止て沙指晴夜ふ
只獨り波詞(思)るもさくくふ 右の首沙の例
沙求止とも沙初女をさく思ふ所ハ思ふを沙

西門より道ゆく二三下沙林より沙持来ぬ
相房は沙衣色を右沙服着て去るを右世
沙沙年七

一 同十三年 西子七月六日 家老公の信依て 西宮
武州・江戸の沙城より沙元服し居る沙おれ
るを徳川鷹野光國と沙右宮より沙世附年
九

一 同十五年 西宮二月廿日 西宮沙具思は沙初女
沙沙年十一

かく半華大切ふ及ひ下と違くとしれ初成の
 小甘極重庵も字意那少子松久氏庵を純空と
 少僧子少りを少相覺の上使侍察一の通印
 家督少相覺の上使也 松久君は少僧子成且む松久君の
 少僧妻松久君経縁をも山門九四王
 枝葉不滅水
 少僧重子 少家督後少家督侍り少家督も
 多くハ以長考の少僧一進せよと以以本亦ハ
 愼きおを庵妻也といふ所ハ 西山少少家督
 少語成成りて少家督をハ以本初て少事少那良
 四百少僧く之具初房少少遊去後三年の方

初房公の少は重を以用ハク一と後改字成能
 又和空に初房は少僧初成不座を少僧方の
 有を少家督の後之無きを以之少史とに
 少僧は少僧也

一 同二年癸卯 純空 印家督の後功し水戸界
 向の少僧成く少僧を以て少僧少僧少僧少僧冠
 少く印廟少僧成初房少僧遊玄の初の少僧く
 少僧成少僧少僧少僧少僧少僧少僧少僧少僧
 少僧少僧少僧少僧少僧少僧少僧少僧少僧
 少僧少僧少僧少僧少僧少僧少僧少僧少僧

上以城中一古少科理下且金限衣被を給ふ
少平年四十一

一 延宝元年癸丑孔子堂を水戸少少三の所一四日
以少は戸約一武以常屋敷小於位位を以是
其れ以少中の諸寺の内少以釋以并水少
属一奈の成或を以男也其成聖堂の小形殿
堂廊應より門牆益物迄而少以給を以之れ
以少少平年四十六
同二年乙卯二月

後西尾帝より勅額よく律待三首以依り天龍
寺の傍虎村方一を御少少以給 詩畧之
同六年戊午正月乙未少集文和和文二年卷中
来被一の世

天聰不達一以以給也

後西院帝後杖桑拾葉集少附勅撰
准せり世少平年四十一

一 同八年庚申杖桑拾葉集
後西院帝一御少少以給

神皇御事上りて世に世時御年五十六

一 元禄三年庚午 西山彼人より信守より常子新敷

と贈りし一紙年よは氏少能一亦豊年あり

と一とも鑑察紙獨老殿の族子能一と一平

以坐依り世時御内と穿鑿發見して鑑察紙

獨老殿等の男女武百七拾四人有之則彼等よ

以授持する又彼人より信守牛馬の疾少用

するを菅原氏共平はまこの烟料を多め是より

して今ふ世に世時御あり 西山於子をと度

世にありてせむ奴

一 同平十月十日 西山御遠居信條公に家督

相續同十日 西山於中 幼少御信守

世に御信守を以て

信守の御信守を以て老の身

藤乃里より信守の御信

同十月廿九日水産しりなり成りて信守

鷺の羽

我今年致仕歸故郷仲冬二十九日夙

發江戸之邸臨別賦詩遺男九成文不
如點信口謾道一笑胡盧

元祿庚午冬、道跡東海濱、致仕解印綬、銀
作葛又民盤施、廣^其箕野、一洗榮辱塵、昔從
首陽^敵、今羨吳江^尊、三十有年來、風志忽
欲伸、予去又何處、不知再會辰、嗚呼汝欽
哉、治國必依仁、禍始自閨門、慎勿亂五倫、
朋友盡禮義、且暮慮志純、古謂君不君、臣不
可不臣、

右の詩條を綴條云、
寫於一紙終の意、
是成回言、
の位、
見、
勤、
論、

大樹公は格、

少年をもつて平偏成於るもこの酒造の我
も酒造自かゝる根上思ひはるも上の酒造にき
中へ是すもたれてとて一度と五年と氣持の根
少若世所自かゝる味——くく酒造をく
老中へと相續せしむる達上上國も達——右と云
孰中少座は度隠括り少將徳徳家
督者遠く不主事希望のり、難有故少若
く若と云く中納言上清任高職少くく納言少
少く、飾り具か及友ふ不隠括以後少くく酒造

新く達を辞退せしむ 上表の上すく酒造
少くさ若老中頻く少く少く及くくを鬼と角も云
く酒造少若くく酒造り酒造り中近き少くく酒
何と云く酒造り酒造り大菱少若くく酒造り酒造り
何と云く酒造り酒造り酒造り酒造り酒造り酒造り
事少く酒造り酒造り酒造り酒造り酒造り酒造り
少く酒造り酒造り酒造り酒造り酒造り酒造り
少く酒造り酒造り酒造り酒造り酒造り酒造り
少く酒造り酒造り酒造り酒造り酒造り酒造り

ふし一入満迄十九日我の家督相継ぐて嘉永
三年十月成らる中家督の面ふ何とて哀
憐の致方もてまゝも存之にも次子少介
ヤウも是れもきやもをすく利通年少介の位
茂園病没れりて一人もてまゝも存之り
依とすくまゝも存之り我の家督相継ぐて
女おたの進を母を過我の家督相継ぐて
子進家法濟り度と致年終る世辰は我の家
督のありの存之りて先年清伯^将とて

子とて世嗣ふすく所ふの幸なりて甲世迄
とてまゝ存之り女おを最首我の家督相継ぐ
の進家督を譲る世辰は我の家督相継ぐ
事成らるる年月は送る世辰は我の家督相
継ぐて成らるる命なりてまゝも存之り
子とて自人の後おたの進の位なりて
とてまゝも存之り一男も成れ命を相
替るる致方人の働く位きとのも致方
少将^将少介とてまゝも存之り事も皆備するに成ら

と作道の右の柳葉成り老人を不及十若
年成者近と感心すまう皆と海をわし
成成退者休ハ 西山と後少休下の世用兼
少く少逗留成又より久志郡太田郷西山
少遠在成少休ハ少休ハ成成成成成成
西山の隠士と少休ハ成成成成成成の外
以五社の男女甚少く多くと病少く少休ハ
の少休成成成成成成成成成成成成成
自教以定成成成成成成成成成成成成

批判三千多くハ西山と批判三千ハ成成成
いふ少自教以定成成成成成成成成成成
少休ハ成成成成成成成成成成成成成
同年少休成成成成成成成成成成成成
例少休成成成成成成成成成成成成
少休成成成成成成成成成成成成
後畧ハ成成成成成成成成成成成成

一 同五年 壬申八月 按別淡川上休ハ助市良
峯宗淳と少休成成成成成成成成成成

碑と立石或は之を楯と云ふ也
後一丈碑面ハ 西云は自筆少く 鳴呼忠
臣楠子墓と云は神陰少く 舜水曾て楯並に
漢正彫也 且又碑亭と云は建元、養子樹の
古木のありしと 世良醫士山廣後任膳守の本堂
のうしろく山傍にあり 世徳即年六十

一回六年癸卯久慈郡天神村といふ所ハ山村
西の者も意家の天神といふ元經を交 西云
山北味がこれといふ天神七代の神少く 五平ハ

相世社を建立すは自筆少く 七代天神宮と
額を授く多病といふも 同十月に潔敏を
これ中に冠せり 且志信神傳中酒に痛^弊難を
し指す音楽神樂祝詞と云 舞踊のしは抱
く 同十年治承元年と云は例當少佐并く色
妙薬三百九十金といふ集の救民妙薬集といふ
書物も成板は信行と云は信貞の氏といふ下
これ石の思はは山形と醫師といふ 薬と云
はくは本後と云は病と云は神を善く成は

死感々々は感々廢入とぞる去まゝ有るは故
を不使ふ思ふこれ波書と作すも世傳は年
六十六

一 因七年甲戌三月 大樹綱吉の喜喜不依々
西山江戸へ出たり 故不依々文少即也城の
故不依々大書の少海釋と少所望は故不依々
少依々はつり少海釋と少依々傳事と少
少不依々少海を少海釋と少依々三徳領の
少不依々少の訓と少國家とく天とを治す少

文主の止於至哀々々取れり少と 洋少依々の了と
少々々々は時凶歳六十七

同八年乙亥三月 西山江戸歸府は故 世不辭水
先生碑場電

明徴先生朱子學と云は碑場を安積荒之落
荒不依々少の相少と云は感是より前辭水
先生年去の初武別江戸約込別在少祠堂
を以て了 計少依々少安至は故毎年忘り少
少不依々少の世傳場電少は世傳少の辭水送

文章卷以集口人深光因輯と云はり世の

少平六十八

一 因十年丁丑二月より久慈郡馬場村より儒臣
と云はれ經書の注釋を多岐台氏との教の爲に
と云はれ氣を牛武別戸小石川の田原安
水戸田城平少と諸士の爲に譯教を授けり
若くは病を癒ふ爲に思ふにや此好むを成
けり少老年少成と云はれ少用ひ少公三陽
村の譯教少と云はれ錢芥下は少廿廿世村少平

七千

一 因十二年庚辰西堂一兩年以來田原安水
田原安水と減り少少り少少今今本十月少少り
少病氣村外少少り少世氣 大樹田原安水
聽はれ田原安水之少田原少り少田原安水之少り
少り少病氣少 田原安水と田原安水の少病氣
少心許り少 田原安水の少病氣少り少り少
上使と云はれ少書少書度、少書又田原安水の
少少少少り少と云はれ 上使の少り 田原安水の

秋をいそぐ伊子れい海ふ

秋初に松屋山終極大聖院とて信田村の
即札が秋草をさるる色紙ふ

西やうきの月夜うれくも

云々一宿うらな座の志くはゆ

又因ら

地僻無人訪 梵然獨樂天 桃愁燈火下 煎

病藥爐邊眠少添 宵水情虛了世縁縁曾吞
拚梅眼何不促終焉

一 西堂所遊去の月肚の朔日返を西座ふつる

色は平生の如く西座友(西若々々)は後ふ

以夜取志を若直れ西寄くるを西座を後ふ世若

伊反七内左親世々世々の細條云のし何少を西

山少古語しと世分若 西ふは若く古若れ

道智の人成以遠三時餘西密法を後不定を西

改若の事と成し後直り後く人若中ちて

たゞれ心のむききかをいづるゝをな静ふ
りぬにるにのりきくち相はりてしすく清
く是をとい程すく心の成なる是に事い
事い人將をなしてはれ上は台のたあさく
此湯とす秋いり遊をまゝいばは細く成
せよは程静すくする程のまの終るゆき
ふらそすよ遊きぬぬは病中て度とあり
抱くは成なりは老をそや

一 物山は遠拓の後常くは世にせの人まが

静世をナク 侍程寂ぬは去病室の雨よまらぬ
のりさともまごころ成りて後拓すは戸張
るをいし中おふゆ〜まは侍_{以前}の静世と
作すはは病中すは静世とあり遊物と
あつる

一 和堂の四位輝也出の外まきもやききとるは
後醍醐帝印刷の印なきに備武華文絶代
名とては震災と遊又胡群玉の尹趾完詩
未入技柔界先聞水産名と化けい今_{は遊}

去の由成問名一及て是公卿殿上人に成
少々をくは以別ををいしをて是は重傷の
和歌并系文系不敷有不詳不忠迷載之上者武家
塩忠記とて諸公乃城と郡主の苦忠を批判
しる書抄密上流布信之書白水戸中ね
光玉卿未承之さうすうて王家改道を
任せる文武成さし不学之前才智良明之
道成之く治め恵之むく義を之ちく之を
之之或々世方の答主人を集く治法を

以跡答之く之く之不書之又宮文之平
麦屋戸の柳城下馬不之及書を之平之く之後言
五智人水戸宰相光玉余は七賢人姓名十愚人
姓名誰之と書之く之報之の之さ之ある事之近五聖
人を書之く之不之神心成記之く之り又此
前長崎一平之高安不之金胡群人之名取の
友之とて水戸公平安會之りや之不之取之長
一西堂若之は付之りし之意向之を之好幾之少之有
言其の四方之は中之不之及之職之の之有之く之常布

ナリ書籍所持の用を多しと云くは温室施
或は金銀を多しと求む人又て世に去
向なくして中々と書に代りて書れ
半紙下りの反古道を見たり不
紙の去り少あり和漢の好反書物
集り出さるるは其書籍を多く秘
る縁を戒く口外くおとすは皆
事し朝庭の故実を我獨得く家業の資
世人や或々又奇書を行くは原
ふらん

少人や果は豪魚不揃せしは没字の原紙あり
或は火災ふすなり一冊子鳥有し
世古の書籍高岡実事はよひて紙
世人はくくろの多し
うり関東関西両地不残
之の正るともて方は
東の寸志原不
其書許容を若世長を
清く沙汰する人
右の寸志

降すく勤りけん事をそととて信具彰
 考館書下のをけり五百年の史記を以撰せし不
 可ふ以書おを構へては神書歎書礼典の類
 要を初包くの以書おを編集信補或は新撰其
 之程はのく儒志社達を歎多者有識之天文
 者ふ多く以絶之程は書物所の是書書白
 一 會館者可辰半入本刻退
 一 書策謹不可汚壞紛失之
 一 蕞談争論宜最戒之

一 論文考査各當竭力着有他所駁則虛
 心議之勿執獨見

一 在席勿怠惰放肆

一 秘室は初才のし付あり十七八の頃近はると分
 け實祖又香珠院殿のし方ふ多くはし入成
 されは紀列のの違を一可ふまーしりははは
 紀列のの婚原おとりの以方とや 婚原を要し
はしととや
 村しきしとや絶之の以岩息とや 絶之を要し
はしととや
 院殿を始ありしし門のさく 秘室波婚原

先あるをすいへて友思ふれども 融らなく
同姓不娶の徳を守り武士の命を捨て性を志
て節義を立たる後代の名義惜らぬ色欲不
満とて道なき一類と断命 會秋の歌すも
とある事なきのりぢならんことまひされ故
婚合を人のよきをくつまへしとてさうせ
うお甘思右の手もあともしはあせんとし肉淫
をふ人同ふをあらざるもさうとてあやむか
たあは後少少の事なれどもあらまひ

さる事となりしこといひ聞えを語り
西宮も音とのやとていふしとて附の女房達
ふ世若しとて信やめとておふけを神とて
神心之娘を道月すけせむ娘若は形形の
とてさるをいひぬる 今日本工とて人のしは
あひ少く渡を結してきこひ結くをきき年
さらとも 隠取をさし思ふとてさしひま
かゆらるるよとて結して思ひくまへり者を
同姓不娶の徳をさうとてさるをいひけりよ

いさゝの世戯よりすきい事とてなつては色
を改めたり

一
仲云しは屋住の時を思ひては女中あり
候へばは古昔より何事なるに候者か、
告より若む折房云のし年ふ入り使志言
し、
仲云は、
者なりしそとを後思ひ、
そ科なきとの成三回とす、
とさうな使候とて、
故程言言の者知をなれ

一
主方母と密にお話後、
とく、
密程は彼女中と主言の姉おは、
物も、
女中、
以て、
入、
以、
し、

何れも此席をひくよき中より上より目元位
付通し程ふ形ひすゆりて色く於手ぬか
りぬれを懸止りて安甘右を執 幼定具ふ
十右衛門を篤く志す五御少中亦余儀に
せえりていひ教を中とて親友を使ひ名の
事ありていふありていふ世方より目元
を中より程の事自達とていふと行あり
いふと細ありて色くすた又のしむ使はる
り付袖をいへりしをす遊云の後よりて怪を

目元中付をいふていふありていふの教の事
次少すすて怪のなきありていふ方々程
彼者のいひ始れりていふに信然とていふ
程なきの事と成てて目元を今も首より若
て又の格或准とていふりていふ心の事
たりすも若くともいふりていふありてい
却て恨平程さきとていふ格或札程さきの
事を呼ひまき有者の事並おは成りていふ
たりていふも彼少付是少目元中付少く

一 篤々合點後以積ふて方中開せし
とてしつ日見不を信行然達とも毎本に
おのの衣被及ひ奉ふてさくる物も絶て送
ふて遊云の陰に十数年以來に益益
從申夫婦の死後此を成妙樂にやまて
ほ巻院の此乳母之存を牧せしとん臣名筆漢とせん

一 西云きし生の内を至初よりしり
奉しりて各々を奉りて乳沙法を大石小
石中より取ら成出家者も阿くま女の子形
を為しりて三三或を老人十人余と奉りて

女中を抱させり水戸の寺家少僧をな被成
せり人終おすと抱せりてわが成事おは不
審成は事と人の中あり

一 西云きし生の内を至初よりしり
奉しりて各々を奉りて乳沙法を大石小
石中より取ら成出家者も阿くま女の子形
を為しりて三三或を老人十人余と奉りて

一 奉りて勅使江戸へしり白の首ハしり家の四方
尾州紀州へしり成は加ふ勅使のしり
水戸

一 神の居を佛への帰を云々との事也
一 西云大風大地震の時日光山の役人某等許一
及父を多き神廟の不安言を以て多敷の白偏未
敷山へと坊上寺と以人々を以佛殿の不安言を
以國成の水戸の伊廟瑞龍は其以奉所字に
不反事也

一 西云若夫以時より以先後追百精との事は
別号一以金朝夕の以膳一汗一菜の康食を以
よと述故人之命より酒局を禁滅せしめ料理

塩梅おと酒を禁より以初の以精無以侍給之
おはたか之以親との述を云ふより以平念又ハ
毎年の以心忘月を或一七口或三言或宵
より以精を潔斎之成りて其以精との事
事石の如く白偏以親類の以中ハ以平を以
以方より以忘くを以中ハ其以月口の光も以高
より以高を以て以以空の外を以水も以庭を以
より以具以受中或は以精をのけを以道臣
より及儒士等三尺人お話の爲て世との難信

石文如

一 西宮少母久昌院殿の由事久慈郡橋本村久
昌寺の佛殿法堂位牌銘念堂方丈念堂障樓
大般若堂経堂山門厨庫浴盆水布式のみ不
以建法式以改之役者を以併り三村の勤りたり
なり且法義感は友の音楽まを稽古を以修
又四年迄を以て法華千部の由法事を以て
美感法十種傳法音楽和歌の抄録抄紙との
以傳法を以成り又幸ふし年忌の法以互に以

少くも由法事毎日に衣冠を以久昌寺の由法
事抄録^{以傳法}日延室二年丁巳十七回忌少母の
られ少母西宮少母に以事りたり別方^以又
以淨齋の由衣冠を以て室に礼して法義經堂の
二種系以三十卷うを板少書寫成法は
以て取箱を入進して以て法義經堂の由
日蓮上人乃空光の題目を以寫し礼堂の由
少母を以久昌寺の佛殿の本堂を以成り
母堂由進言の初を以忘すは法義經堂由

巖の側乃地を穿り納りて以て四忘七回忘
十二回忘二十三四忘廿七回忘と云也忘毎不也精
在の内彼此其控の以考ふは嘉經を畫寫するが
以て七部之以内一七の内少書寫をせりて巨匠
神あり是誠と摩訶衍卷口是久居寺の小大中仁
々根を以て度成とを彼僧文をす 後不在後
被れ今久昌寺不納とれん又五部布也
一四母堂のあふ佛具及ハ樂器以納りては
料とて田畑以着附る程又右の文昌寺の

一
道不三昧堂といふ事ありは此を以て宗なきは此の
溝水をし建海堂倉堂新化寮ある残出造とせ
るなき能はを以て招きとありの西江を以て建お成
ゆと云ふより可化多く集りん是又少母の世も
控のあやう又四條生りふ蓮華寺日多一信也
られと別々法化経漢調がさし一のねを以て
四母堂の産の時以てとてと何んといふ事あり
終るに存心の何なり也
一 水産は概下ふ心先奇く云事ありは寺の百千

代殿 信長 澤院の比定提調あり 申上る儀事とて

差郡向ふく之所申上るを以て堂様御式の色

より御式を以て改定且証鼓の布御あり

とて御式を以て証鼓の如く種本を以て申

上り申上るを以て申上る人の例とて

相違代殿の比定御式 御式申上る

されば申上るを以て代殿上候申上る

を以て申上るを以て御式申上る

比定御式とて右の申上る御式を以て申上る

美濃代殿御事は始水戸を以て申上る御事
御事申上るを以て御事申上る
美濃代殿の御事御事申上る御事
御事申上る御事申上る御事
御事申上る御事申上る御事
御事申上る御事申上る御事
御事申上る御事申上る御事

一 西宮の御事申上る御事申上る御事

御事申上る御事申上る御事

御事申上る御事申上る御事

御事申上る御事申上る御事

山花淡紅を花とて一筆さく世にさるる父母は
死別を惜み煙ふささるる暮しのさるる人を日ごと
くすはるる時くさるる或は年月ごとくさるる
日とさるる忘まんとはさるる或は年月ごとくさるる
まともさるる物たりとさるるいさるるさるる
事とさるる中さるる思ふ事とてさるるさるる
臣自らは情と自らは感とさるるぬ

一 李長吉 解體三行 樂府全 山花 蘇 李長吉以下は 蘇詩 柳

山花 山花 山花 山花 山花 山花 山花 山花 山花 山花

春をを可くさるる母の仇傷を扶へる海子合和
羊藥誰ふ茶残入く携けゆく所さるるさるる
是を涼さるるさるる日暖ぬを求めて母をたか
まへく田ふあさ畑ふられ一畦二畦さるるいさるる
母の例一言く顔色を顔ひおさるる麻子の茶酒
食のすさるるさるる紅さるる是れさるるの田畑をさるる
せん母たふ酒を好り目とさるる酒を求るさるる
と初めさるるさるるさるる日夜をさるる
事さるるさるるさるるさるる延賢の始 西云

はりのをなす一及れぬ(一)此等の義法は、ふ
きまきり彼者をなす金一とくひた名の世を
すくひて法は、法のふと、まじりて、まじりて、
此の法は、法は、法は、法は、法は、法は、
けま我、けま我、けま我、けま我、けま我、
たると、けま我、けま我、けま我、けま我、
愚鈍なるを、けま我、けま我、けま我、
事と、まじりて、けま我、けま我、
まじりて、まじりて、まじりて、まじりて、

その後儒臣、まじりて、法は、法は、法は、
形阿郡、山形村、大津、武蔵、吉野、昌徳、
百姓あり、父を、まじりて、まじりて、
物も、眼病を、けま我、けま我、
知、けま我、けま我、けま我、けま我、
まじりて、父を、まじりて、まじりて、
まじりて、父を、まじりて、まじりて、
まじりて、父を、まじりて、まじりて、
まじりて、父を、まじりて、まじりて、

かばはは時時を用をさしきて止るぬれ色少
とき好むを何所か帰るに今もさしむぬる
財部をさしきて先かく用事おつるれども
おつるぬる用を本中へ歸る時海あり
涙くく父母も女もあつるなりかや武造高壯
年少及年過ハ妻を遣てさる存分の後方妻
おとさば中合のあふ妻もすし夫の教を
まふおしをも存分をさる 縁ふ父の市所
左の坂有老病醫らる上りしむ 神井あり

いとも短くき命も終ふ死せる武造の夫婦
なきおれあふのさしきておとさる 死後を
重縁目を残し年成終るししと又位牌おはる
幸に縁おする時の如くせし母もや年を以
縁酒さ好ま付く仕つる事若く倍さる程
座をのさしきて所へ病ささる瘧少くさし
こころの母を痛くしあ夫婦しそ久他後
母の寝入るる内ハ夫婦を抵しむおと
度ハ母の仕く寝るるや言くおとさる

只此心のあつふおりまゝ一箱をて取らるなり
せしむるも大なるためじ色なく程更なるはな
まはる母と兄の言へん人お對するこゝろをまはる
孝行をたげりおと涙をなす一箱を以て
仕へて人皆感歎せしと云ふなり一箱
奉中 西宮 山陰 此事をす百及んれお
はかしの昔彼家一四五右の者を以て後
件の親と申すなりて且江戸一箱を
経緯云々と以て箱を以て感すして一箱

米重相 西宮に依ると傳ふ書せぬ

一 那阿那村松村お次と傳ふと云合致百程より父を
遊ませりて七十小餘りお次と傳ふと云父お佐一
孝行なり元禄十三年父逝るなり お次 其後
お次は絶たぬと傳ふなり お次 其後 お次
こころ押しおと お次 事なり お次 親お次入
魂のとのとてお次と傳ふと云父の體お次お次
お次とてむくお次お次お次お次お次
一箱を お次 次と傳ふなり お次 父 お次 一箱

必定也棺の中少くもつゞの若はさすえんといふ
三つぐ棺をあけ又う體と取却りて遂とも種
生え紋にん世形長 西宮なるの港(西宮)
に托りて無^有無^有有^有有^有彼村の龍藏寺にて兼
て入^り前^の種^の名^をと^り而^の氏^をい^はす^を且
醫^所於^於未^宗白^は信^をて^いひ^らる^うり^もけ^は信
し^らふ^うさ^しい^の名^の西^のま^で印^用と^と名^を取^りま^す
あ^らう^種治^は信^を種^をと^と名^をと^り信^を甘^をる^うた^彼家^に
あり^種を^用い^はれ^るも^名と^す取^りと^す種^をと^す藥

咽^入も^りん^をさ^うら^らう^らら^う自^身を^種藥^中に^一流
し^た種^をと^り誠^に種^を生^せら^うゆ^て家^與立^つゆ^うと^あ
抑^藥箱^すり^し種^をと^り取^りて^個合^は用^して^い
種^を生^じ元^氣忙^忙成^すん^だと^いふ^を今^を宗^宗無^六
と^いふ^に收^つる^子を^して^後宗^無歸^て印^はれ^る
お^れれ^る何^方か^を取^りて^見え^るす^てを^して^種
以^て天^の欠^くみ^少く^及ひ^しう^き以^て醫^療す^べし^と
す^る種^を生^じま^すと^いふ^に種^をと^り種^を取^りて^彼家^に

集りて病中も百睡を以てふしんとして物言はして
 細事と信はぬ故に我は所く事とて人々唯醫
 療とて之れ彼者厚水の懐不感として我を
 以て所不却しといふ故を以て彼者を療治せし先
 給ふる一とてそそけの外にきき色こそ食友百
 埋の申すとも定く食物を定むる一途に白米
 増極登米乾粟生米もき給ふ用内所の物と
 以て彼を送りてありと云ふ一途に信はて人々
 是をわたり早く為給ふといふ且又其を以て此の

首彼家よりききありて次を事を取られ給ふ看
 病仕つき申す信はりて金一色し投りされ
 村の役人を石宗與言て病人の指師は給ふ
 大紙薬取言用ひてせむ給ふて信はりて彼に
 此山に百睡言の首を本也

一 形河郡登上村に無治者ありて十百姓あり
 之妻と安んじりて岩屋村に郡の百姓の娘を娶
 彼女は波の玉嫁に官をすくち波のありて病治
 して波揚病治ありて霞
 人の交りてすくち波のありて

此身と此世の女房お對し、
生れ付て見えず、
我もつゝを以て何れと
君は後子不表らるを
あしぬき、
少くも又女房に
言ふに、
恨みは、
はやくは、

かすりたる姑のたぐひ、
いゝ仕へ、
へとも、
女房を、
信ね、
さあ、
を、
は、
し、

疑を以て貞を以て守る事、亦甚く、縁を以て
高宗が、此の家、貞女、成く、後、下人と、あり、馬を
持て、去、夫、歸、ふ、成、は、女、房、着、病、の、際、女、の
身、を、以、て、淋、を、取、り、田、代、に、一、畑、を、与、へ、夫、房
は、音、は、な、武、財、西、山、と、ま、ま、道、に、な、り、は、成、は、な、り、
彼、女、房、田、を、と、り、以、居、す、幾、日、後、夫、女、の、身、と
し、て、田、代、を、取、り、以、て、非、道、の、主、人、と、は、な、り、又、は
縁、を、以、て、お、く、を、親、の、為、に、中、け、を、取、鬼、角
と、細、と、り、の、と、思、は、れ、り、那、の、者、を、以、思、因、せ、り、と、

右の原中、右、西、山、一、つ、ま、ま、れ、感、歎、不、斜
そ、家、一、し、ま、あ、彼、病、丈、を、と、り、後、女、房、を
以、つ、り、金、一、包、を、且、世、に、縁、條、を、以、て、縁、を、以
お、彼、者、の、田、細、水、代、作、り、取、り、て、作、り、以、縁、を、以、
か、以、縁、を、以、縁、を、以、て、取、り、作、り、者、使、取、り、以、縁、を、以、
感、以、縁、を、以、を、以、る、の、命、り、心、を、以、金、銀、米、錢、等、を、彼、丈
歸、ふ、送、り、り、

一、夕、野、郡、小、井、村、の、百、姓、控、在、り、お、居、を、言、つ、り、妻、を、同
村、の、内、館、原、と、す、年、の、又、は、命、と、を、者、を、恭、養、一、

密に度々伺はせし中より此の如く復讐を
守り心をくじり不中哉時丈の控たる馬を
引く高の爲武州に居りて中を尋ねて
復讐又中より事と思ひ復讐不女房の國
其の心を女房目を覚まし丈の力のまじり成
さると復讐くく不切中にて男をくくし
くく切中即座に殺し中を復讐不女房
不切中を復讐くく復讐くく復讐くく復讐くく
此の如くの時は丈婦と在り中久は復讐不復讐を

此の如く復讐後の事也

一 久慈郡今久村の者因郡西深村の者、

深村の者多助田村水戸屋敷よりの平れりて中者の

家より遠く平れりて復讐不女房物居

中より復讐不女房復讐不女房復讐不女房復讐不女房

不女房復讐不女房復讐不女房復讐不女房復讐不女房

不女房復讐不女房復讐不女房復讐不女房復讐不女房

不女房復讐不女房復讐不女房復讐不女房復讐不女房

不女房復讐不女房復讐不女房復讐不女房復讐不女房

押合うしそ何をも推す平安の所へるといふも
そはゆきも流金十まき一貫幣幣くそささきと
しんしんとくしんを返さし押入は行事も不能引逃
るるといふは西宮寺石橋と有といひ討つ女乃
所とて神妙なる徳方なく夫の教とてくればと
去知れぬしし神火災絶し原野に水の首被り
ゆ成り神徳徳五百百し料理多しとて石舎と
強う強のまゝ強

一 形阿部菅谷村を水戸より 西宮の性深の道へ

西宮或時水戸へ西宮の首被村をゆかりぬかぬと
とる馬成極倉有る巨陸陸とて是遊すくをゆ
り成り流流成り使の徳も思は波有ふとさ馬を飼
りくく徳徳とて多し右に馬馬をば歴歴ゆ年せし
飼ひ振ふと多し舟も舟臣民とて取り西宮悲の道に
東成感感何とて多し多西宮後の
幸幸

一 元禄年中遊り上人水戸へ東宮流流成り舟
実盛とてあひ境を打ちゆり 西宮のし自ら
無無とて流流しゆとてふとて西宮実盛とて流家

の古くは平家一降承成之を武切何かもあつ
とも我と平家を逢て二心の士は武具を任
任ふ非はくは任^{以任指後}のよき

一 或年三井一通を中人も見舞くも江戸より
西山へ送られしを惜く遠路夜を過りて
宴の奥平家我成に逢て不掩原の二夜のを
西山の園を終りて任方の深火を見交ぬを
そぞろに任ふ付死やせんといをすく平家
流を流し給事ハふとや戰場お臨んで死を

一途不極く世不敵かとも伺ひあつてそぞろに
引ふ流を二日と隔のまをりてあ思然なり武士
の常をともまじも子孫の為なりといふ事は又
心得る流をふ致おそれ引返す事なきを
私のみ進退し君の為不忠義を彼をの心處
そろも見え我下流に彼を思ひたり子孫を養
育するに何の用とや天下の大事とあつて高橋を
引去りてお我ハ胡お臨ても皆一度お付然を
彼より所をまはりて見と笑を合て三股なり

憲を以て帝曰一杖不依なんかともせも美大なる
天恩の萬多言をを難はらふくも言れども信
一西は信の序は信少志田尾為信仍其村も六
段あり
は東照宮に敵討信を信より千多村の
大小を考ふ身をもるきは信申す所村の道を
は為家くまらしく十信を信仍すて為家個
伏の心ゆくのもくすくる者、平生は信の事をも
忠義を合して志田くまらしく心を定むる事信ふ
心信又信信も石田治部左衛門殿くまらしく

者なり人存きと信為少信と之信少人をもるもを
信者敵なり信信くまらしく君臣をも信の信
事なり且信信日向守光秀は忠義信を大賊に
之信く信長との忠信不たかく信ありあはる
可る信の代少をも信信信くまらしく信不
信信くまらしく者信信信くまらしく信の忠信
後代の君臣却信信をつくまらしく信は
信者の大逆信信の礼信信を信くまらしく信
信信なり信信の賊信信信信用信信を信

改道不波動なく彼等のを控利おけり後ね
よき一平一あこそこいふらつよき提督を伴の
若智識とのこまづ心こもる位

一 西宮印家督伊左衛門の柳原家来を對し由
成少も者式玉酒屋河つこまの酒屋へ酒徒
のみもらぬ人世酒を求む位く富富華丸
少そ家少朋大いんとす人禽夫おを酒屋
来者成少と喰付おれり酒屋くといも彼
大寺いふく思ひ酒屋おまるといふと絶て

三家會友成りて中事ありそ方甘もは能
んは人禽夫お成りあ中れ相おとる位

一 西宮し年生人のこちを多くは具のりてま
に能をも取取の物牛若き者のあやすり
此岸成り候く有程の者も後より人成り
少り常く伊家まふ由心くを控りてそ方
甘も生進より律儀志巨成を控りて
存也成の控りの人を聖賢のそ今この世も
たまに考今時生より律儀者と油法はるふ

愚成との身、又若き時に法住りて不後亦能
人少成其事、其よりを始重役、其より
若き時を安んずる色、其より安んずる法、
調度よとせざる志、其より思ふは、
士の六法をば、彼は不常ある事、其より又、
られざる、其のよし、其より、
子孫の福、其より、其より、
心、其より、其より、
事、其より、其より、

うま、其より、其より、
少、其より、其より、
度、其より、其より、
其より、其より、
其より、其より、
其より、其より、
其より、其より、
其より、其より、
其より、其より、
其より、其より、

法生の無厭疾男之曾近毎月勤行十百廿口極礼
に任付^レ其^レ誠^レ道^レ居^レて^レ不^レ怠^レ大^レ誓^レの^レ極^レ礼^レ法^レ法^レ
此^レ若^レの^レ心^レも^レ人^レも^レ男^レ實^レ推^レを^レ以^レ決^レせ^レれ
又^レ其^レ心^レも^レ人^レも^レ男^レ實^レ推^レを^レ以^レ決^レせ^レれ
其^レ心^レも^レ人^レも^レ男^レ實^レ推^レを^レ以^レ決^レせ^レれ

一 和室に自対の者上四自対の仕指也、此は授巻
海き思石のす、又割れま^レる^レと^レ思^レは^レり^レと^レ思^レは^レり^レ
むきの事を言ふ^レと^レ思^レは^レり^レと^レ思^レは^レり^レ
こゝろおの^レと^レ思^レは^レり^レと^レ思^レは^レり^レ

津東少く^レは^レ授^レま^レす^レと^レ思^レは^レり^レと^レ思^レは^レり^レ
女色と^レ思^レは^レり^レと^レ思^レは^レり^レ
男色と^レ思^レは^レり^レと^レ思^レは^レり^レ

一 貞享元年八月坊田道前也
守^後長^後保^後不^後誠^後家
場^後少^後く^後は^後授^後ま^後す^後と^後思^後は^後り^後と^後思^後は^後り^後
の^後こ^後ろ^後に^後打^後也^後誠^後家^後の^後心^後も^後人^後も^後男^後實^後推^後を^後以^後決^後せ^後れ^後
後^後條^後を^後及^後び^後し^後て^後授^後ま^後す^後と^後思^後は^後り^後と^後思^後は^後り^後
石^後を^後館^後に^後し^後て^後守^後内^後定^後ま^後す^後と^後思^後は^後り^後と^後思^後は^後り^後

迎美親の流の羽の雅を吊いしりる人言ふ
並あふに控感寄り或れあやも道中より

あふ市と云しりは

一 概の信定良 信定良の叙
品如後千石 大樹家老のしる書名の

人信くし他界の信達くし引しりる道日良山

一 新道則を信くしに神靈の誠を信くし

まはる長成 西玄常 而國を成別くしは

信くしあ定良率去の信告事しりて道信信くし

信くし自筆文と信くしに秘教の馬と記物し

四半せし後寺より 彼馬の口信取し 牧 出放しせ

抄

一 中山市文信心 信心信の叙
信心信の叙 懐古の後風軒と号し風軒屋

相取しりる文信心 而信しりる信心信の叙

是死後又彼定しりる七三の信心信せしりる信

此存の信と信心信の叙 相取しりるの信心信

少信書有信心

東のしりる信心信の叙

あふ信心信の叙

一 三葉別所初名信長之初名信長者後を西少く十紀重の
より初名信長の別所是初名信長の成少く別所之
病風府とも別所事と云付皆此後成林之
以若所之別所信長は信長は信長中より少
以若所之別所信長は信長は信長中より少
者とも云付一初名信長の成少く別所之
者とも云付一初名信長の成少く別所之
別所之信長信長は信長は信長中より少
渡り成林信長は信長は信長中より少

ちや、あや

一 植房公の比代より一信長公の者助目ある者
或る重なる役信長を別所より信長をく家断
絶は信長 西宮に款を以てせめての依り思ふと
此年成林信長は信長は信長中より少
重者田代所長吉吉松平公の康通末より少
たしんていそと家断信長を以てせめて

馬

哲德編卷之十七終

